

随 想

良い英文を書くために—  
論文を英語で書くこつ (2)

氏 家 信 久\*

はじめに

Incredible though it seems... あれから5年もたつてしまった。

あれというのは、筆者がこの前、“良い英文を書くために一論文を英語で書くこつ”をこの随想欄に投稿した時のことで、それは1981年(第67年)第1号であつた<sup>1)</sup>。

その時、Trans. ISIJ は一つの転機を迎えていた。我が国の製鉄・製鋼・加工の科学・技術が世界的な優越性を確立するに従つて、『鉄と鋼』を始めとする学術誌・技術誌の論文が、著者に対する挨拶もろくに——往々にして全く——なく、しかも営利的に、翻訳されるケースが目に見えようになつたのである。

これに対して、協会は二つの手を打つた。その一は、日本鉄鋼協会の全出版物に著作権を設定することであり、その二は、『鉄と鋼』に採択された論文の多くが、Trans. ISIJ に投稿されるように働きかけることであつた。筆者の“論文を英語で書くこつ”は、編集委員会欧文誌分科会の同意を得て、他の数編の御寄稿と共に、この第二の目的で、『鉄と鋼』に掲載していただいたものである。そしてこの小文で、私は、「我々の使う英語は、英米人が国語とする英語では無く、科学・技術の世界に於ける国際語としての英語である」との立場から、Trans. ISIJ 投稿原稿によく見られる、文法的に間違っている訳ではないので、英米人にみせても直してくれないが、重大な誤解の種となり兼ねない語法や表現をとり上げることにした。そして、第一回のつもりで、「1. 主語」では editor's we の用法、「2. 関係代名詞」では“that”と、“which”の使い分け、そして「3. 分詞構文」では前置詞へと進化してしまつた現在分詞と dangling participle との違い、の問題を解説した。

あれから5年の歳月が、それこそアッという間にたつてしまつた。日本の鉄鋼の科学・技術の優位は、揺るぎなく確定されたし、また、Trans. ISIJ に、優れた original 論文が数多く投稿されるようになつた。更に、著作権設定のお蔭で、無許可営業の翻訳も、少くともおつびらには、行われなくなつた。しかし、欧文誌分科会としては、『鉄と鋼』の読者の皆さんに、Trans. ISIJ への御投稿を、もつともつと盛んにしていただきたい、それはトップの座を占めた者の obligation である、と考えている。

今回の投稿は、この願いをこめて行つた。論旨、論調

とも、前稿と全く同じなので、その続編として読んでいただきたい。幸いにして連載が許可されれば、4. 動詞、5. 形容詞、6. 前置詞・熟語・熟語動詞、7. 助動詞、8. ラテン語と、英作文上の問題点と対策を考えていきたい。

4. 動 詞

- (1) Consider the dog dead.
- (2) Consider this proposition.
- (3) Consider the price.
- (4) Consider her feelings.

科学技術論文は公式文書である。従つて、使われる字句も、それにふさわしい重みがあるものを選びたい。それは全く正しい。そこで、非常に多くの人達が、think と言いたい時 consider を使いたがる—それも it is considered that... の形で。

しかし、上の例文を見ていただきたい。

まず、(1) では、君は新聞を配達している所だ。恐ろしい顔をした犬が、牙をむき出してウーッとうなつている。そこで、君は自分に言いかけす。『あの犬は、死んでいると考えろ。』つまり、この場合、“考える”は“みなす”で、consider=regard as なのだ。

次に、(2) では、君はプロフェッサーだ。君は黒板に何やら難かしい数式を書き、おもむろに哀れな学生をにらみつけて言う。『この命題を考えて見たまえ。』すなわち、君の“考えよ”は“吟味せよ”で、この場合 consider=examine にほかならない。

次の(3)では、君はドラ息子にスポーツカーをねだられているオヤジだ。車の性能論では全然かなわないので、君はせめてオヤジの威厳をみせて言つてやるのだ。『値段のことを考えろ。』つまりここでは、consider が take into account の意味で使われている。

最後の(4)では、君は新入女子社員の教育を猛烈にやっている係長を、心配しながら見ている課長さんだ。ちよつと行き過ぎだと思つた君は、係長を物陰に呼んで注意してやるのだ。『あの娘の気持も考えてやれよ。』そして、この場合の consider は、“尊重する”，すなわち pay respect to なのだ。

上の4例は、現代英語に於ける日常会話での頻度の順ではない—例えば、Oxford Universal Dictionary (Oxford English Dictionary の短縮版) には9種の意味が出ていて、その歴史的な出現順は2, 3, 4, 1とされており、また、Longman Dictionary of Contemporary English では、2, 1, 3 (4を含む) となつている。

しかし、科学技術論文に現れる consider は、一別に統計をとつた訳ではないが、一概して上のようで、consider がお望みの“熟慮”の意味そのもので使われるのは、This is my considered opinion. (これが私の熟慮の結果の意見である。) ぐらいしか見当たらないのである。

つまり、consider は、“良く考える”には違いないの

\* 石川島播磨重工業(株)技術研究所 Dr. Eng.

だが、think の偉い言葉ではなく、it is considered は、“…と思う”ないしは“…と思われる”の莊重版ではないのである。英語でも米語でも、it is considered that…と言われて、まずピンとくるのは、これは it is generally regarded that…の意味、すなわち、that 以下は、当業界の誰でもそう思っている常識と理解することで、次に、それでは文意が通らなければ、著者が非英語国民であることを考慮 (consider) して、it is considered (=regarded) by the author that…と読んでみるかと言うことになるのである。この故に、不用意に it is considered that…とやると、『ああ、この著者、苦しまぎれに勝手な仮定を置いたな』などと、あらぬ疑いをかけられてしまわないとも限らない。

もちろん、それを逆に使つて、あまりくどくどしくなりそうなき、言葉での記述はデータの提示とポイントを衝く説明のみとし、後は読者の判断に任せる、といった気持で、“The effects of this factor are considered demonstrated.”などとするのは、完全に正当的で、またうまい書き方である。

一方、和文原稿の方も、上述の事情に対応できるようにしておくべきであろう。この表現、科学技術論文での“…と思われる”は、我々日本人の間では、“著者おもうに…”の意として結構通るが、実は、誰が、どういう風に“思つた”のかがあいまいなので、それは無責任な表現とされてしまう。そして、これが英文に翻訳されると、よほど物の分かつた人でもなければ、ごく自然に“it is considered that…”となり、上述の悲劇の種を蒔くことになる。この場合、英米人にみてもらつても、文法的に間違つている訳ではないので、見過されてしまう—その人もやはり、著者が仮定しているなど consider するだけのこと—なので、御注意いただきたい。

従つて、ここはもつと強く、もつとはつきりと表現して、結論する、判断する、推測する、主張する、などを使うべきであり、英文では、consider している主体を明瞭にして、the author concludes…、the author submits…とするのが良い。

これに対して、think はもつと直感的、従つて主観的なものであるから、著者の過去に於ける経験の表明として、“it was observed (=I observed) that…”と同様に、例えば、“It was thought then that a lower temperature would accomplish the purpose.”と言うふうにするれば良い。

#### ま と め

(1) consider は、上の 4 例に該当する意味でのみ使う。—think の代わりには使わない。

(2) 日本文での“…と思われる”は、英文化されると“it is considered that…”となり、それは『…とみなす』の意味となつてしまうから、特に御注意願いたい。

(3) 一般に、『…と思う』に対する表現は、もつと強く、また明快に、the author concludes that…、the author submits that…、the author postulates that…などと、責任の所在が明確になるように書く。

(4) think は think で立派な言葉であるが、それは著者のみの経験であつて、客観的に秤量できるものではないから、“it was thought…”のように、過去における事実の報告として表現すれば良い。

#### 5. 形容詞

犬が人を噛んだつて—フン

人が犬を噛んだつて—Remarkable!

我々が書く論文、少なくとも Trans. ISIJ に投稿される論文には、“大きい”、つまり great と言う時、remarkable としたものが非常に多い—The increase was remarkable. というように。英語として、remarkable はれつきとした良い言葉である。しかし、それは時と場合によりけりで、使い方にはちよつとしたコツがある。

まず、remarkable は remark+able であり、更に remark は“コメントする気持で口に出して言う”の意味であるから、結局 remarkable とは、“特筆する”ないしは“特記する”に対して、いうならば“特言に値する”ということだと認識していただきたい。つまり、これはもともと主観性の強い、またかなり感情的な言葉であつて、例えば、上例では、人が犬を噛んだつて、フン、何だ、そんなこと、と思う人も多いただろうし、また、人を噛んだ犬が、もし盲導犬だつたとしたら、そして、もし君がブンヤさんだつたら、盲導犬は決してそんなことをしないように教育されているから、“Remarkable! 何かあるに違いない。”と飛び出して行くであろう。

従つて、科学技術論文で remarkable を使う時は、万人が“特筆に値する”と合意してくれるであろう場合に限るべきである。具体的には、例えば、増加が一桁以上であれば、自他共に認める remarkable increase と言えようが、2、3 倍ではまあまあといったところであろうし (2 倍すればひと桁あがる場合が多いことに御注意)、それが 2、30% 程度なら—もちろん物にもよろうが—、remarkable と思うのは君の独りよがりと言われても、仕方あるまい。

それはおかしい、俺は有名な先生が remarkable を論文の中で盛んに使っているのを読んだことがある、と抗議される向きが多いと思う。しかし、良く思い出していただきたい。それは、展望、総説、解説、教科書の類ではなかつただろうか? 前回<sup>1)</sup>の 1. 主語で述べたように、報告書や人文科学系の論文も含めて、それらは主観性、直感性が尊重されるべきものであつて、客観性が生命であるはずの研究論文とは性格を異にすることを考えていただきたい。

いずれにせよ、上に述べたように、remarkable は、

心得て使いさえすれば、切れのいい良い言葉であつて、定性的な表現では、例えば理論値と実験値の合致度合ならば、良から悪の順に、superb, remarkable, excellent, good, fair, bad, non at all である。ただし、superb は commercialese (宣伝語) だから、よほどのことでもなければ使うべきではない (科学技術論文で superb が正當に使える人には、この記事を読む資格が無い)。一方、数量的な表現には、小から大の順に、noticeable (perceptible), appreciable, substantial, considerable, enormous となり、substantial と considerable でいわゆる“相当な”で表現される範囲をカバーする。もちろん、著者の一方的な宣言にならないように、データの提示は最低の前提条件であり、また、幾ら数量的と言つても、全く定量性は無いから、著者の気持を伝えるだけと考へていただきたい。

更に言えば、研究論文では、形容詞はなるべく使わな

い、使う場合には控え目の言葉を選ぶのが良い。例えば、上例で excellent と言いたくても、Agreement is rather good. ぐらいで我慢しておくのがコツである。こういった understatement が君の論文に a great deal of credibility を与えるだけでなく、a good deal of force をも与えてくれるのである。

#### ま と め

(1) remarkable は“びつくりした、‘特言’に値する”と、読者が誰でも認めてくれるであろう時にのみ使う。

(2) 一般に、研究論文では、形容詞はできるだけ使わない方がいい。主観性を排し、客観性を保つためである。

#### 文 献

- 1) 氏家信久: 鉄と鋼, 67 (1981), p. 200